

「命」の重さと「言葉」 6月29日

6月半ばに、道徳(3年)の授業教材として、徳島新聞5月28日付の記事『デマの傷癒やす善意のキャベツ』を取り上げ、生徒たちが、「コロナ禍」の中での人のつながりについて、クラスの仲間と考えたことは、先に学校HPでも紹介しました。

その後、取材記者の方に授業後の感想をお返したところ、「ちゃんと考えたことが伝わる言葉に感激した。」との返信。さらに、当事者であった海陽のスーパーの方からは、「従業員に配ります。…一度学校へも伺いたい…」と。



授業での真剣な学びが、新たなつながりを生み出して、先週25日(木)の朝、突喰から大黒さんと山上さんのお二人が来校され、3年生の各クラスで、わずかな時間でしたが生徒たちに直接話して下さいました。

「うわさ」「デマ」によって、来店する客が激減したときのことや、かつて困っていたときに寄り添った知人がキャベツを届けてくれたときのことなど、新聞記事での出来事について詳しく話されるのだろうと予想していたのですが、それよりもさらに時間を割いて語られた話に、私自身も生徒と共に学ぶことができました。

大黒さんは、今回掲載された新聞記事を示しながら、強い口調でおっしゃいました。「明るい出来事として紹介された私の記事より、同じ一面のコラムに注目してほしい。」と。大黒さんのキャベツの話の真下にある、この日の徳新コラム『鳴潮』には… SNSでの誹謗中傷によって急死した22歳の女子プロレスラーが取り上げられていました。

続いて大黒さんは、「私の場合には、目に見える相手がいる、ありもしないうわさやデマで言葉の暴力にあったけれど、目に見える相手には事実を説明したり、また支えてもらうこともできた。」
「ネットの場合には、目に見えない誰かわからない人が、人の命を平気で奪っている。」
「ゲームをリセットするときように、失われた命は決してもどってこない。」
そしてさらに…

「一番大切なのは、お金でも仕事でも名誉でもなく命なんだ。あなたたちの命を、家族や仲間や地域の誰もが大事に思っているんだ。」と、伝えて下さいました。



私たちの社会は、「言葉」によってつながれています。マスクをしてソーシャル・ディスタンスをとる日常だからこそ、『津田中を笑顔と言葉でつなごう』と、私自身も皆さんにメッセージを送っています。

今回、大黒さんに出会えたことを通じて、今こそ誰もが、言葉の「使い手」として、時には「命」をも左右する「言葉の力」について、しっかり考える必要があると実感しました。

学校長